



2017/11/11 22:05 神戸新聞NEXT

## 災害資料を後世にどう託すか 神戸大で国際シンポ



災害資料の保存などについて意見交換したシンポジウム＝神戸大統合研究拠点コンベンションホール



被災した歴史資料や、災害時の公文書、ウェブサイトなどの「災害資料」を次世代にどう継承するかを考える国際シンポジウムが11日、神戸大統合研究拠点コンベンションホール（神戸市中央区港島南町7）で始まった。国内外の研究者ら約70人が参加し、阪神・淡路大震災や東日本大震災後の取り組みを語り合った。

神戸大大学院の奥村弘教授らの研究グループが主催し、12日まで続く。奥村教授は「資料を残すことが災害の記憶を伝えることにつながる」と狙いを話す。

初日のテーマは災害資料。米ハーバード大のアンドルー・ゴードン教授は基調講演で、自身に関わる東日本大震災などのデジタルアーカイブを紹介。ホームページ上で、震災直後のツイートやブログなどを網羅的に見られる仕組みで、「デジタル情報は日々変化し、失われてしまう。振り返ることで新しい発見がある」と強調した。

筑波大の白井哲哉教授は、東京電力福島第1原発事故後の避難関連資料を集める活動を伝え、「資料は未来のためだけでなく、現在の被災者のために使われるべきだ。資料を見て、他人に体験を語れることがある」と話した。（上田勇紀）